

## 研究大会報告

東南アジア学会会報

いわゆる ASEAN ディバイドの問題に直面することになったのは、その一例である。また東アジア共同体構想の浮上は、ASEAN の存在意義を高めている反面、東南アジアとしてのまとまりを相対化する側面もあるように見える。さらに、中国経済圏やインド経済圏の急成長は、ASEAN にとっての脅威であると同時に、結束強化の要因でもある。経済面での「アジアのアジア化」と呼ばれる状況が、東アジアという規模で見た場合にはじめて成り立つ話なのか、「東南アジアの東南アジア化」を内包しつつ展開されているのかは、経済実態に即した検討を要する課題であろう。

メコン圏開発のように国際開発の受け皿としてサブ・リージョンを設定する動きも見られるが、こうした動きの東南アジアあるいは ASEAN との関係も、両義性があるように思われる。さらに政治体制の民主化、市民社会の連携は、共同体としての ASEAN を展望すると長期的には不可欠な要素に見えるが、短期的には権威主義体制が担ってきた ASEAN の指導力を低下させている面があるなど、地域統合との関係を問わざるをえない面があり、そこでナショナリズムの役割や、先行する地域共同体 EU の経験との対比など、多くの問題が存在する。こうした問題を検討する上では、歴史世界としての東南アジアがそもそもどのような性格をもっていたのかという歴史的視点を念頭に置くことも、きわめて重要な意味をもっていると考えられる。

本シンポジウムではこうした東南アジア地域の 10 年の歩みを振り返り、「東南アジア」という枠組みの意味とそのゆくえを政治・経済・ASEAN 論などの現代的視点と歴史世界としての東南アジアという歴史的視点の双方から検討したい。

### 地域主義の湧き源としての東南アジア——ASEAN への注目

山影進（東京大学）

20 世紀末から今世紀にかけて、東南アジアを核としてさまざまな地域主義が湧き上がっている。この現象は東南アジアだけに見られる現象ではないので、東南アジアのユニークさを浮き彫りにしているわけではない。ユニークかどうかはさておき、グローバル化が進行する中での地域主

義・地域形成の世界的潮流の中で、東南アジアにおけるその特徴を整理しておくことは、少なくともアジアないしアジア太平洋国際関係を考える上で重要である。その論点はふたつある。まず、東南アジアの人々自体がどのような変化のベクトルを作り出そうとしているのか、言い換えると「新 ASEAN」はいかなる意味で新しくなろうとしているのか、である。そして、その ASEAN は周辺地域を巻き込んで広域東アジアあるいはまだ名前を与えられていない新しい地域枠組みをどのようなものにしようとしているのか、言い換えると、「新 ASEAN」はアジアをどのように変えようとしているのか、である。以上の 2 点を中心に問題提起してみたい。

### 国際的生産ネットワークの形成と経済統合のハブ＝スポーク・システム

木村福成

（慶應義塾大学／ERIA チーフ・エコノミスト）

1990 年代以降、東南アジアは、北東アジアとともに、世界に例のない精緻な国際的生産ネットワークの構築に成功してきた。伝統的な産業単位の国際分業に代わって機械産業を中心とする生産工程単位の国際分業が発達し、企業レベルのフラグメンテーション（分散立地）と産業・業種レベルでの集積形成が同時に進行した。国際的生産ネットワークを設計・コントロールしているのは多国籍企業であるが、集積の中では地場系企業の生産ネットワークへの参加も見られるようになってきた。他地域に先駆けて生産ネットワークが形成された背景には、1980 年代後半あるいは 1990 年代初頭以降の積極的 direct 投資受入政策と電子部品等を中心とする一方的貿易自由化、アジア通貨危機以降の政策面の経済統合の中での包括的な貿易自由化・円滑化があった。これらの政策改革においては、巨大な直接投資のアトラクターとして登場してきた中国に対する危機感が強い動機となった。

東南アジアは、ASEAN を単位とする経済統合の深化と (ASEAN+1)xX の FTAs のハブ＝スポーク・システム構築においても、一定の成果を上げてきた。東南アジアの場合、FTAs 網のハブといっても、経済規模も相対的に小さく、また投資するというよりは投資されている地域であり、スポ

一ケ間の統合を促すインセンティブは弱い。その結果、日中韓の統合が遅れる中、東アジアの FTAs 網は地域概念を深化させるといふよりは、むしろ地域外に開放された形で展開されてきている。外に開かれた経済統合は、最近の「地域主義の多角化 (multilateralizing regionalism)」の議論ともあいまって、WTO ドーハラウンド後の新たな国際通商政策秩序形成の萌芽となる可能性を秘めている。

### ＜東南アジア＞研究における地域と専門

白石隆

(政策研究大学院大学／アジア経済研究所)

地域は常に戦略的なものである。一方、専門 (discipline) はわれわれの思考を型にはめ (discipline)、かたちを与える。ではく東南アジア＞研究において地域と専門はどのような可能性を開き、どのような可能性を閉じてきたのか。

### 「臨床の知」としての歴史空間

早瀬晋三 (大阪市立大学)

近代であるなら、「東南アジアとは？」と訊かれれば、近代に支配的であった国民国家の集合体として、10ヶ国をあげればよかった (東ティモールはまだなかった)。学問としても分業体制の下、排他的に歴史学としてどう考察すればいいかを、一方的に語ればよかった。しかし、国民国家という枠組みの重要性が相対的に低下し、学際的・学融合的研究の必要性が増してくると、そう単純に答えられなくなった。考察の対象も複雑で、地理的にも、分野的にも、簡単に設定できなくなった。まず、「だれのため？ なんのため？ なぜ歴史研究で考察する必要があるのか？」を明確にしたうえで、それにそって地理的枠組みなどを設定する必要がある。また、外国研究であるなら、なぜ日本人が研究する必要があるのかを説明しなければならない。外国人による研究の紹介や焼き直しのような研究の意義は、近代より少なくなっている。換言すれば、東南アジア史研究が現在の社会・学問的世界とどう向きあって考察・分析を進めるのか、「臨床の知」としての存在意義を明らかにしなければならなくなった。

地理的枠組みは、生活の場である個人・家庭、コミュニティから地球規模までであるが、最小の単

位でさえ地球規模と結びつくことを考えなければならぬ。つまり、東南アジアのどの社会を取りあげようとも、本シンポジウムのタイトル通り「世界の中の東南アジア」であるべきだ。そして、地球規模で考えるとき、その事例として東南アジアが適しているのかが問われる。もし、ほかの地域の事例研究の成果を東南アジアに応用できるのなら、東南アジアを研究する意味は少なくなる。また、現代の事象だけで研究することができ、歴史的に培われてきたものとして現代をとらえる必要がなければ、歴史研究も必要ないということになる。あるいは、歴史学を専門としない研究者が歴史的に考察することで、こと足りるなら、歴史学を専門とする研究者は必要ない。しかし、それらを判断できるだけの十分な研究蓄積はない。とくに、東南アジア研究のように、研究蓄積の乏しい分野は、まず基礎研究の充実を図らなければならない。

歴史研究の基本は、いうまでもなく原史料の読解にある。その原史料の信憑性・価値について吟味する考証は、とくに近代文献史学にとって重要であった。しかし、文献考証にもとづく歴史研究は、文献を重視する周期性のある陸域温帯の定着農耕民社会にとっては有効であっても、例外の連続で、その場その場で臨機応変に対処しなければならなかった遊牧民や海洋民の社会では、意味をなさない。文献考証にこだわれば、歴史学は近代歴史学から離脱できなくなり、近代文献史学で十分に語るができなかった東南アジアのような地域の歴史は依然として二次的に扱われ、グローバル化時代にふさわしい世界史の登場を妨げることになる。

いま、文献にかわる史料として、口述史料、考古学史料だけでなく、絵画や美術工芸品、建築、身体・動作などからも歴史的考察をしようとしている。しかし、これら非文献史料だけで、歴史を語ることはかなり困難で、非文献史料を考察・分析するためにも、文献史料の考察・分析が必要となってくる。本報告では、文献史料と口述史料から、その地域性・空間を考え、最後に、歴史は国家に属するのか、地域に属するのか、民族に属するのか、文化・社会に属するのか、・・・なにに属するのかを考えたい。